

当報告の内容は著者の著作物です。
Copyrighted materials of the author.

ブータンを知る文化講座

仏教王と戦争

---ブータン第四代国王による2003年アッサム・ゲリラ国外追撃作戦---

講師：ツェリン・タシ（ブータン王立自然保護協会）
通訳・解説：今枝由郎（元フランス国立科学研究センター）
主催：AA研言語ダイナミクス科学研究プロジェクト
日時：2012年10月17日（水）18:00-19:30
場所：AA研304号室

概要：

「国民総幸福」理念の提唱者であるブータン第四代国王が2003年末に起した軍事作戦については、日本ではほとんど知られていない。本講演会では、この軍事作戦に義勇軍として参加したツェリン・タシ氏をお招きし、当時のお話を詳しく伺った。

この軍事作戦は、インドからの分離・独立を主張してインド軍と戦い、ブータン南部に立て籠った3,000名程のアッサム・ゲリラを国外に駆逐するために、第四代国王の陣頭指揮の下、行われたものである。ブータンは、1997年から2003年にかけての6年間、ブータンから自発的に撤去するようゲリラ兵たちに説得・勧告したが、ゲリラ部隊は応じなかった。これはブータンにとって自国の安全を脅かす深刻な事態であると同時に、隣国であり最大の友好国インドに対して微妙な立場に立たされた。アッサム・ゲリラによるテロ活動が長期化するにつれ、インド政府はブータンがアッサム分離・独立派ゲリラを擁護しているの見なすようになり、ついにはブータンに対して最後通牒を突きつけてきたのである。これを受けてブータンは、この事態を自らの手で収拾せざるをえなくなり、2003年秋にブータン国会は、最後の手段としてゲリラ部隊を軍事行動により国外退去させることを決議した。その結果、ブータンはゲリラ部隊国外一掃作戦を実行することになった。この時誰もが驚いたのは、政府首脳、閣僚、軍総司令官はじめ中央政府は首都ティンプに残ったまま、国王自身がブータン軍兵士および国民義勇兵（内一人は国王の次男）合わせて総勢6,736名の陣頭指揮に出かけたことである。1998年来、国王はすでに政府首脳ではなかったが、国の独立・安全の保守は国家元首であり、ブータン軍の大元帥である国王の任務であったからである。このとき義勇兵として従軍したツェリン・タシ氏は、最近発表した回想録の中で以下のように記している。

国王の陣頭指揮にもまして、誰もが驚いたのは、国王の開戦訓示に続いて、一人の高僧が演壇に立ち、次のような訓話をしたことであった。

「あなた方は兵士といえども、慈悲心を持たねばならず、敵も、他の人間と同じように扱わねばならない。

あなた方は、あるいは夫であり、子供であり、親であり、兄弟であり、友だちである。ゲリラ兵たちも全員、誰かと何らかの関係にあることに変わりない。

そして何よりも、仏教徒としては、殺生が許されると思ってはならない」

この訓話を聞いたツェリン・タシ氏は、こう回想している。

「わたしは、どうしたことだろう、と思いました。中国の著名な古典であり、戦略のバイブルとされている孫子の『兵法』には、戦闘に先立って、「敵を破るのには、兵士を怒りに駆り立てねばならない」と記してありますが、これはまったくその逆の訓話でした」

この反応は、戦争という、およそ仏教とは相容れない行ないに突入せざるを得なくなったブータンのジレンマそのものを浮彫りにしている。

一般的軍事常識からすれば、3,000名のゲリラを相手にする場合、その10倍の30,000人の兵力が必要とされる。ところが、上に述べたようにブータン側の兵力は7,000名弱で、必要とされる兵力の3分の1しかなく、この劣勢では軍事作戦の成功は覚束なかった。ところが蓋を開けて見ると、ゲリラ部隊は二日間で一掃され、ブータンの電撃的勝利に終わった。

勝利を収めたとき、国王はブータン軍にこう訓示したという。

「戦闘が終わったからといって、喜ぶ理由は何もない。軍事的規準からして、勝利は速やかで、戦果は優れたものであった。しかし、戦争行為において誉れとできるものは何一つない。いつの時代にあっても、国家にとって最善なのは、係争を平和裡に解決することである。ブータンは、いかなる状況に置いても、軍の戦力を頼ることがあってはならない。世界の二大大国に挟まれた小国という地理的状況からして、軍事力でもって主権を守るといような考えは決して許されない。ブータンにとっての最善にして唯一可能な国防は、近隣諸国との友好・信頼関係である」

この「二日間戦争」が無事に終わり、国王は首都ティンプに戻ったが、それを知っていた者はほとんどおらず、もちろん盛大な歓迎式典はなかった、というよりは、まさに何もなかった。

現在に至るまで、アッサム側からの報復行為はいっさい行なわれていないという事実は、こうしたブータン側の配慮、態度に呼応したものであろう。

10年近く経過した今、この軍事作戦はほとんど忘れ去られたかのようなのである。しかし今日ブータンを訪れる人たちは、この2003年の軍事作戦の遺品を、意外な場所で目にすることができる。それは、ドチュラ峠に建立された109基のドゥク・ワンゲル・チョルテン（ブータン勝利記念仏塔）の傍らに建つお堂の中である。この中の護法尊を祀る一室の壁には、アッサム・ゲリラから没収された数々の武器が吊り下げられている。お寺のお堂に武器を吊り下げるのは、日本人的感觉からすれば奇怪であり、不可解であろうが、ブータン人は、こうした武器はアッサム・ゲリラに対する勝利をもたらしてくれた護法尊への感謝の捧げ物と見なしている。過去においても、数多くの護法尊が、仏教的秩序を乱す外敵を調伏し、かれらに平和の価値を諭してくれたと考えられている。そして特徴的なのは、こうして調伏された外敵は、今度は逆に護法尊に変身することである。この考えは、古くからのチベット系仏教の伝統である。

仏教に限らず、いかなる宗教にとっても、戦争はどんな名目であれ、正当化できるものではない。しかし、主権国家にとって、自国の安全を確保することは至上命令であり、この観点からは戦争も正当化される。この二つの立場・視点は、本質的には相容れないものであるが、この地球上に領土と国民を持つ国家としては、その宗教の如何に関わらず何らかの形で妥協点を見いださざるを得ない。ブータン第四代国王の態度は、戦争という必要悪に対する、仏教徒としてとりうる限りの最善の態度と評価できるものなのではなかろうか。

(文・今枝由郎)